

LSC NEWS LETTER

Learning Support Center 広島修道大学
学習支援センター

2022 No.35

広島修道大学
Hiroshima Shudo University

Contents

学習支援センターにとって初年次教育とは何だったのか… 1 修大基礎講座「目標設定と時間管理」をふりかえって… 2
1年次の学びと生活に関するアンケート… 4 第12回 教育力アップセミナー… 5 第74回 LSCドキュメンタリー・アワー開催報告… 6
LSC資料紹介… 7 <学び★サブリ>本の表紙を開く前に・日本リメディアル教育学会第17回全国大会参加報告… 8

学習支援センターにとって 初年次教育 とは何だったのか



○ 学習支援センター長
松川 太一

2022年4月に学習支援センター長を拝命した。その直後に耳に入ったのが、学習支援センター（以下、LSC）がコーディネートを担当してきた修大基礎講座は2023年度をもって終了するという、学長を中心とした執行部による方針であった。執行部による新カリキュラム改定案では、新しい全学共通科目を2024年度から開講し、それにともない現行カリキュラムの修大基礎講座と初年次セミナーについては「学部・学科の主専攻にて教育内容も含めて検討」（第764回大学評議会資料）という扱いになった。

現行カリキュラムの修大基礎講座と初年次セミナーは、どちらも初年次教育を担う授業科目として修道スタンダード科目に分類されており、カリキュラム上は学部・学科の主専攻科目の外側にある。現在の高等教育政策では、三つのポリシーの策定・運用にもとづく教学マネジメントが大学に求められている。初年次教育が学部・学科の主専攻科目の外側にある現行カリキュラムでは、学部・学科のディプロマ・ポリシーの達成をゴールとしたカリキュラムのスタート地点に初年次教育をうまく位置づけることができない。それゆえ、初年次教育を学部・学科の主専攻科目の内側に組み込むというカリキュラム改定は起こるべくして起きたと言えるかもしれない。

しかし「主要な支援領域を初年次教育に定め」（『広島修道大学五十年史』p.360）てきたLSCにとって、修大基礎講座の終了は（それが寝耳に水だったこともあり）大きな衝撃だった。LSCは2005年4月に設立された。そしてLSCがコーディネートを担当してきた「修大基礎講座」は、2007年度から始まった修道スタンダード科目の「ファーストイヤー・セミナーⅠ」に由来する。なぜ設

立直後のLSCは主要な支援領域を初年次教育に定めたのか。この判断の背景について、亀崎澄夫初代学習支援センター長は「執行部は当初学習支援センターをリメディアル教育の全学組織と考えていたが、〔中略〕たとえ学生が日本語・英語などの能力不足を感じていても、〔中略〕学生が自発的に学習支援センターを訪れ基礎学力を補おうとすることは期待しにくかった」（日本リメディアル教育学会監修、2012『大学における学習支援への挑戦』ナカニシヤ出版、p.234）と記している。つまり、全学共通の初年次教育を立ち上げた背景には、学習支援の必要な学生が自発的にLSCを訪れることは期待できないため、教職員から学生のほうへ歩み寄る必要があるという考えがあった。

大学の学習支援において、初年次教育は教職員から学生のほうへと歩み寄る重要な場である。もちろん修大基礎講座がなくなった2024年度以降の初年次教育においても、ひきつづき学部・学科教員から学生のほうへの歩み寄りはずつとつづく。しかしLSCにとっては、学生のほうへ歩み寄る場のひとつであった修大基礎講座を失うことになる。初年次教育で扱うアカデミック・スキルの学習支援については、LSCでは修大基礎講座以外にも学生向けワークショップ等を開催している。とは言え、ワークショップ参加のきっかけとして修大基礎講座で配布したチラシをあげる1年次生が多いなど、LSCにとって修大基礎講座は学習支援の橋頭堡でもあった。その橋頭堡を失う2024年度以降は、学習支援の必要な学生が自発的にLSCを訪れることを待てども学生は来ないという、LSC設立直後に懸念された状況に逆戻りする可能性もある。

学部・学科の主専攻科目の内側に組み込まれた初年次教育を前提として、これからのLSCはどのように学生のほうへ歩み寄っていくのか。これまでとは異なる新しいアプローチを考える時期が来ている。

修大基礎講座「目標設定と時間管理」をふりかえって

— 授業と課題の取り組みから —

学習アドバイザー
谷岡 亮
齋藤 佳子

学習支援センターがコーディネートしている修大基礎講座は「修道スタンダード科目」に位置付けられている初年次の科目で、全学共通の学習内容となっています。この修大基礎講座では修大生が大学で学ぶ上で必要な学習スキルや生活態度、本学の特徴について学ぶ授業となっています。その中でも部局担当の授業では「ノートテイキング」「4年間の学びの設計」「図書館活用法」の「学習スキル」のユニットと「修大の歴史と成長サポート体制」「自己発見と自律へのアプローチ」「目標設定と時間管理」の「大学生としての姿勢」に分かれます。その中でも「目標設定と時間管理」はコロナ禍のため過去2年間は対面での授業実施はできず、そのため学習支援センターにて動画を作成しオンデマンドでの実施でした。今年度より、感染対策を講じたうえで対面での授業となりました。

「目標設定と時間管理」の授業について

「目標設定と時間管理」の授業は、目標設定の重要性を理解し、行動目標を立てることができるようになる、また、時間の使い方の現状分析を行い、より良い時間の使い方を考えられるようになる、という2点を目的に大学生活における時間管理の重要性と管理の方法について学んでいきます。

授業は主に3つのパートに分かれ、まずは目標設定について実例をもとに問題点を考察し、そこから(1)長期、中期、短期の順で立てる(2)自ら求め、決める(3)できるだけ具体的に設定するの3つのコツを学びます。

その後、思考マップを使って実際に目標や行動目標を考えていきます。思考マップとはスポーツ選手や著名人も活用する目標設定ツールです。まず初めに、学生は思考マップの真ん中に、将来の夢や目標であるテーマを書き入れます。続いて、そのテーマを達成するために必要なスキルなど、要素を4つテーマの周りに書いていきます。最後に4つの要素を身に着けるために行うべき日々の行動目標を1つの要素につき3つずつ書き込んでいきます。

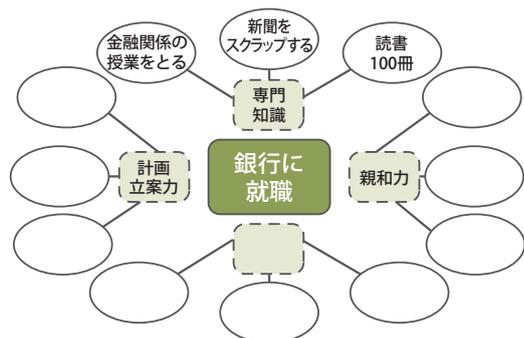


図1. 思考マップの例

思ったよりも多くの学生が、将来どのような仕事に就きたいか決まっておき、テンポよく作業を進めていました。中でも教員や公務員になりたいといったテーマはどの学部も共通して多く見られ、中には馬主になりたいなどユニークなテーマを設定する学生も見られました。将来の夢や目標が決まっていない学生は、より身近なもので、例えば、「将来の目標を見つける」、「留学をする」などをテーマとして書いてもらいました。一見、漠然としたテーマに見えるかもしれませんが、そこから必要な要素をきちんと考えることで、身に着けるべきスキルを理解し、最終的には日常生活の中で行うべき行動目標が明確になります。

思考マップを使って、自身の将来の目標、それに必要なスキルを身に着けるために必要な日々の行動を明確にした後は、時間管理について考えていきます。学生は事前課題として授業の前週、1週間のスケジュールをレジメに記入してきます。年度初めの5月、6月時点での1年生はまだどのように大学で授業を中心にスケジュールを組むべきか理解していないため、学生の1週間のスケジュールを見ると特別な課題が出ていない限り、授業以外での勉強時間をスケジュールに組み込む学生は非常に稀で、授業以外はサークル、アルバイト、ゲーム、テレビ・動画の視聴などが多くみられます。まずはどのように1週間を過ごしていたのか振り返ってもらい、その後、スケジュール表の中の内容をA. 学習、B. 課外活動、C. 生活に分類し、それぞれにどのくらいの時間を費やしているのか計算し、自身のスケジュールを分析してもらいます。分析した結果を用いてペアワークを行い、互いのスケジュールの気づきを意見交換します。自分のスケジュールを俯瞰的に振り返ったり、他の学生がどのような生活を送っているのか知り、自らのスケジュールについて考えることは学生にとってもいい機会です。多くの学生がこのペアワークでC. 生活の時間が多すぎることや自身の生活が思っていたより不規則である、睡眠時間が少ないのではないかなど気づきがあったようでした。さらにより効率的に日々のスケジュールを立てるために、重要度×緊急度マトリクスを紹介し、スケジュールは重要度が高く、緊急度が高いものから優先的に組んでいくことを理解してもらいました。

徐々に学生もスケジュールへの考え方が深まり、スケジュールの質を向上させることができきていますが、最後に仕上げとして、大学での学習時間をスケジュールに加えてもらいます。ワークとして、履修している1教科あたり1週間に最低1時間¹の予習もしくは復習する時間を設け、朱書きで記入してもらいました。1科目につき1時間

は予習もしくは復習する時間を設けるため、学生はゲームやYouTubeの視聴といった娯楽の時間を減らさざるを得ないのですが、〇〇の授業の復習、予習といった時間が増え、大学生らしいスケジュールが完成していきます。学生の中にはこのような授業があるまでは大学であまり勉強しなくてもよいのではないかと考えていたり、どのように大学生としてスケジュールを立てるべきなのか不安のある学生もいるように見えましたが、授業を通してどのようにスケジュールを立てていくべきか理解できていたように思います。

授業外での課題について

授業の最後に学生に授業外の課題が配布されます。ここでは、当日授業で学んだことを生かし、思考マップで決めた行動目標を含めながら再度1週間のスケジュールをまとめ、その際に意識した内容を記述してもらいます。

図2. 授業外での課題

課題では、次のような設問を出しています。

- (1)「修大の歴史と成長サポート体制」「自己発見と自律へのアプローチ」の授業も踏まえて行動目標を立てましょう。そして、1科目あたり1時間以上の課外学習時間を組み込み、さらに、行動目標を反映させた1週間の予定表を完成させなさい。
- (2)行動目標や各部局の授業内容を、どのように予定表に生かしたかわかるように具体的に説明してください。

この2つの設問に対し、多くの学生が真面目に取り組んでくれました。1週間の予定表は細かく予定が書きこまれ、自分の目標や、そのためになぜこの予定の組み立て方になったのか、これまでの授業を踏まえて説明されていました。

一方で、空欄が目立ち、読みづらい字で書かれているようなものがあったことも事実です。学生が充実した学生生活を送れるよう、自分事として考えられるような授業を目指していますが、より多くの学生に問題意識を持ってもらうには、まだ課題が残ります。

ここからは、提出された課題から、学生たちがどのように行動目標を設定したか、予定表を組み立てたかを紙幅が

許す限りで紹介したいと思います。

課題で学生たちが掲げた行動目標にはさまざまなものがあります。大学卒業後に就きたい職業を見据えたと予想される行動目標を書く学生も散見されました。また学業とアルバイトや部活の両立、「課題が出された日に済ませる」「規則正しく過ごす」「健康に過ごす」などの堅実な行動目標や、TOEICや英検、日商簿記など資格試験の勉強をするという行動目標もみられました。

行動目標とは、目標を達成するためにとらなければならない具体的な行動を指します。中には、目標と行動目標を混同しているのか、目標を書くだけで、具体的な行動を示せていない学生もいました。何のためにこの行動をとるのか、将来の目標と現在の行動の関連性を学生自身が意識することが大切です。来年度の授業では、目標と行動目標について、もう少しはっきりと伝える工夫が必要だと気づかされます。

では、実際に1週間の予定はどのように立てられていたのでしょうか。例えば、「規則正しい生活」を行動目標とした学生の場合、時間割に関係なく、毎日決まった時間に起きるように計画をたてるという工夫をしていました。

「課題を忘れずに出す」という行動目標や、資格試験の受験勉強を行動目標にした学生の場合、授業の空きコマや、登下校の隙間時間にこまめに資格試験の勉強の機会を設けたりする工夫をしていました。

この隙間時間の活用は、「目標設定と時間管理」の講義中に提案した時間の活用法の1つでしたが、多くの学生が取り入れ、予定表に反映させていました。学業とアルバイト、部活、サークルを両立させたいという学生にとっては、隙間時間を学業にあてることによって、他の活動にまともな時間をとれるようにするという狙いがあるのかもしれない。

また、1週間分の予定表からは、行動目標達成以外の学生の生活ぶりの実態が見えてきます。興味深かったのは、SNSに時間を割く学生が多いことです。通学時間をSNSの時間にあてている学生もいれば、毎日寝る前にSNSの時間を1、2時間設ける学生も、少なからず見受けられました。SNSをしていたらたまたま時間が経っていた、というのではなく、あらかじめ、SNSが予定に組み込まれているのです。講義中のワークでも、SNSの時間が長すぎると気づく学生がよく見られましたが、あらためて、課題で自分の予定を現実的に考えたとき、SNSの時間は削りたいものだったのかもしれない。

「目標設定と時間管理」では、ペアワークの機会を取り入れ、意見交換の場を設けてきました。同級生がどのような目標を持ち、どのように生活しているのか知ることは、よい刺激になるはずです。本授業が、授業外でも学生が互いを知る機会を持ち、視野を広げるきっかけとなるものであってほしいと思います。

1年次の学びと生活に関するアンケート

— 11年間の結果からみる修大生 —

津原 有美子

学習支援センターが継続してとってきた「1年次の学びと生活に関するアンケート」は、2021年度を以て終了しました。そこで、設問がほぼ固定化された2011年度から11年間の結果を俯瞰し、大まかな学生の意識の変化についてまとめたいと思います。

本アンケートは、1年次終了時に学生が自らの「学び」と「生活」を振り返って、どのように感じたかを自己評価したもので、「大学生活について」6項目と「学習について」19項目の二部で構成されています。

【大学生活について】

大学生活についての質問項目は次の6つです。

- (1) 1年を振り返って大学生活に満足しているか
- (2) 大学生活を送る上での目標は見つかったか
- (3) 平均的な1日の勉強時間について（授業以外）
- (4) 大学生活を有意義に過ごすために必要なものは
- (5) 大学生活を送る上で困ったことは何か
- (6) その不安を解消するためにどう対処しようとしたか

年度を追ってそれぞれの項目を見ていくと、コロナの影響を受けた2020年度を除き、全体的に大きな変化はみられません。ただ、大学生活に対する満足度の「十分満足している」と大学生活を送るうえでの目標が「見つかった」という回答数は11年前と比べると2～3倍にも増えていきます。不安を解消するために「自分で努力した」という回答数も増加の傾向が見られました。

1年次終了段階では、問題解決のために自分で努力して目標設定のうえ大学生活を送り、十分な満足感を得ている学生が段々と増えてきているようです。

【学習について】

学習については〈表1〉のとおり「学習スキル」11項目と「学習に対する姿勢」8項目について尋ねています。回答は「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の四肢択一でした。

まず学習スキル（〈表1〉①～⑪）では、2018年度頃から一斉に「あてはまる」の回答が増え始め、2019～2020年度には殆どの項目で2番目に回答の多い「あまりあてはまらない」を追い越します。（1番目は「ややあてはまる」）その結果、学習スキルの11項目中9項目において「あてはまる」「ややあてはまる」という肯定的自己評価が目立ち始めました。また、追い越すまでいなくても「あてはま

る」の上昇傾向は①～⑪の全項目で見られます。学習スキル全般が身についたと自己評価する学生は近年増加しているのです。

〈表1〉 学習についての全項目

設 問 項 目	
学 習 ス キ ル	① 筋道を立てて話す
	② 事実と意見を分けて書く
	③ 自分の感じや考えを文章で表現する
	④ 自分の考えを根拠を挙げながら書く
	⑤ 文献や資料をその特性を理解して活用する
	⑥ 決められた文字数で要約する
	⑦ 本の内容や話の要点を箇条書きする
	⑧ 授業を受けている時、黒板以外の大切なこともノートにとる
	⑨ 復習その他に活用できるようノートの取り方を工夫する
	⑩ 内容の善し悪しや正誤を考えながら読む
	⑪ 図書館で本を検索し借りる
学 習 に 対 す る 姿 勢	① 日常生活で、自分なりにスケジュールをよく立てる
	② 時間を決めて学習内容を復習する
	③ 本を読んでいる時、その内容が頭に入っている
	④ 授業中、先生の話の聞いている
	⑤ 授業を受けるときはいつも集中できる
	⑥ 学習するのは面倒ではない
	⑦ わからない言葉に出会ったら、自分で調べる
	⑧ 自分の立てた計画通りに学習できる

次に学習の姿勢を見てみます。2019年度迄は多少凸凹がありながらも全体的に変化は小さかったのですが、その後ここ2、3年で変化が大きくなっています。

「日常生活で自分なりにスケジュールをよく立てる」では「あてはまる／ややあてはまる」という肯定的な回答が下降し、「あてはまらない」が上昇してしまいました。大学生活についての(5)においても、困りごとの第1位はスケジュール管理であり、スケジュールを立てられないと感じる学生が年々増加しています。修大基礎講座で「目標設定と時間管理」をテーマに授業をしていますが、これからも意識して伝えていく必要があるでしょう。

また、「授業中、先生の話の聞いている」「授業を受けるときはいつも集中できる」「わからない言葉に出会ったら自分で調べる」では最も多かった「ややあてはまる」が急激に下降し、「あてはまる」と「あてはまらない」の両方が上昇しています。これは学生の二極化のようにも思えます。

【まとめ】

以上のように、いくつかの点で学習に取り組む姿勢に心配があるものの、1年次終了段階で、大学生活において目標を持って十分に満足だと感じ、様々な学習スキルが身についたと肯定的に自己評価する学生が確実に増えてきていることがわかりました。

この肯定的な自己評価と満足が2年次以上になっても、更には卒業時になっても続いていることを、今後は別の調査で見られるよう期待しています。

第12回

教育力アップセミナー

参加者
からの声マネジリアル・マインド、
非営利組織のマーケティング

商学部助教 徐 康勲



今回の「教育力アップセミナー」に参加し、本学が当面している主要課題について他の参加者の方々と意見を共有しながら、特に勉強になった点、印象に残った内容を、いくつかのキーワードを中心に述べたい。

1. マネジリアル・マインド

去年赴任したばかりの教員として課題が何かを聞くと、いかに良い授業や研究ができるか、職場としての大学生活に馴染み、一人前の教員になれるかという「個人の持続可能性」の課題ばかりだと言える。

今回の「教育力アップセミナー」で個人ではなく「大学の持続可能性」について真面目に考えてみるきっかけとなった。

事実上、私が本学の重大な意思決定を単独で行うことはあまりないと思う。教員の仕事は比較的、個人でやるのが多く、転職が頻繁に起こるなど、なかなかマネジリアル・マインドが形成されにくい仕事だと思う。しかし、短い時間でありながらマネジリアル・マインドを持ち、組織の課題に取り組むことで、職場への愛着や責任感、楽しさを感じ、盛り上がるのができたと思う。

2. 非営利組織のマーケティング

私のグループで志願者や入学者を増やす方法として、地元の範囲を広げるのはどうかという意見が出た。つまりマーケティング的というと、再度市場細分化を行い、既存の顧客層を拡張する発想である。

一方、最近本学の志願者や入学者が減っているのは、県内の他の私立大学との競争が激しくなっている点、コロナ禍で経済的な負担を感じた学生が国公立大学を志望することになった点なども原因だという意見を聞いた。在学生に聞くと、既に本学に対するある程度まとまった認識があると思うが、それは今後もしかしたら本学の利害関係者の認識や心の中で、国公立大学や他の私立大学に対する新しくより鮮明なイメージを確立させる必要があるという意味かもしれないと思った。

私はマーケティング論という科目を担当しているが、今回のセミナーで他の方々の意見を聞きながら、マーケティング的に解釈をしている自分を発見し、このマーケティング的な知識が大学の課題を解決する上で少しでもヒントを与えられるのではないかと思った。

課題検討におけるデータの活用について

総務部人事課 角田 かのん



今回の教育力アップセミナーでは、「大学を取り巻く社会状況」と「本学の現状」について、アクティブラーニングを活用したグループワークを行いました。

1. 大学を取り巻く社会状況について

「どうすれば志願者数を増やすことができるか」という課題について、ジグソーという手法を用いてグループワークを行いました。参加者が4つのグループに分かれ、グループ内でトピック毎に担当を割り振りました。各トピックの担当者が集まってデータを読み取り、そこで得た情報をグループに持ち帰り共有する、というワークです。グループ内で志願者数を増やすための方策を検討する際、複数の情報を見ることで、自分の担当データだけでは気付くことができなかった多くの視点に気付くことができました。この経験により、精査した情報を基に様々な角度からアプローチを行うことで、課題解決のための、より多くの手段や視点を持つことが可能となることを学びました。

2. 本学の現状について

このセクションでは、ロジックツリーを用いてグループワークを行いました。中心課題が発生する原因を挙げ、さらにその原因が発生する原因を探り…と課題の分析を深掘りしていきます。私たちのグループは、「どうすれば修得単位僅少者の面談実施率を上げることができるか」という中心課題に取り組みました。各学部、学科の単位僅少者面談に関連するデータを読み、学生対応の業務で実際に取り組んでいることや、各自の経験を共有した上で課題解決の手段について検討し、ロジックツリーを展開して行きました。このワークからは、課題や問題の部分だけに目を向けるのではなく、原因の原因を追究し、解決の糸口を探すことの重要性を学びました。

今回のセミナーを通して、課題や問題を解決するためには、情報の収集とデータの活用が重要になると感じました。一方で、グループワークではデータを読み取ることの難しさも痛感したため、必要になるデータの収集や分析、活用について適切な判断ができるよう、データリテラシーの向上に努めたいと思います。また、参加された教職員の皆様からそれぞれの経験や他大学の事例など、様々なお話を伺うことができ大変勉強になりました。

最後に、貴重な機会をいただきました学習支援センターの皆様にご礼申し上げます。

第74回

LSC ドキュメンタリー・アワー開催報告

LSC ドキュメンタリー・アワーとは、本学の教員が自ら選んだドキュメンタリー映像を、教員の解説と共に視聴する企画です。授業とは異なる教員の問題に対するアプローチに触れられる機会になっています。

学習アドバイザー 宮原 千咲

「自分の可能性を広げる

—— 絵本作家 荒井良二の仕事」

講師：人文学部 沼本 秀昭 先生

今回は、絵本作家 荒井良二氏の映像を取り上げ、自分の可能性の広げ方を考えていきました。国際的にも注目を集める荒井良二。起承転結の枠にはまらないストーリーや、独創的な描写から生まれた絵本は多くの子どもを惹きつけます。

映像には、大人の常識に縛られず、子どものように自由に発想し、ひらめきをのせていく制作風景が映し出されていました。筆だけでなく、指や折れた色鉛筆を使って、「描きにくい」という不自由さの中で自由に描きます。

自由奔放に見えながらもそこには、荒井氏の中の「おとな」との激しい葛藤がありました。「おとななんだよな。こどもじゃない。」という言葉がこぼれ、絵本を完成させるために途中からストーリーや絵をまとめようとしてしまう「おとな」の自分との闘いがあります。「今までの俺になってきた」と悔しがり描き直す姿からも、氏の根底にある“知識”や“理屈”に捕らわれない「こども」への尊敬や憧憬が見て取れました。

沼本先生は、これまでの経験に満足せず、苦しみながらもまた新しい自分を見つけようとする荒井良二の姿勢に、今回のテーマの鍵があるのではないかと解説されました。自分を信じ、応援して、そして新しい自分に会っていく。「まだまだやれる」と、自分を肯定し、自分を信じ大切にしていく姿勢によって自分の可能性を広げられるのかもしれない。



参加者の声

- ・技術を得る過程、年齢を重ねていく中でも子どもの部分を失わず、情熱もあるのが本当にすごいと思った。それを保つのはなかなかできることではないと思う。
- ・子ども心を忘れず、子どもに寄り添うような絵を描くということは、子どもに関わる仕事に就きたいと考えている私にも繋がる話だと感じました。

ドキュメンタリー・アワーを振り返る

ドキュメンタリー・アワー (DH) 開催後、沼本先生にインタビューしました。内容を深めるお話を中心にをご紹介します。

—DHを担当されて、いかがでしたか？

準備する中で改めて荒井良二の人間的な魅力を感じました。少しでも魅力を伝えられていたらいいなと思います。

—今回のテーマ「自分の可能性を広げる」という視点から荒井良二を見たとき、いかがでしたか？

荒井良二って、生き方がすごく体当たりですよ。本人の中にある軸を基準にして、常に自分を信じ、励まし、次のステージに進んでいきます。他人からの評価ではなく、自分の価値観を大切に、拠り所にして進んでいくんです。世間からすでに評価されているのに、そこで満足し安住することなく、新しいことに挑戦していく。失敗をしても、そこで新しいものを得て、またどんどん自分の可能性を広げていきます。だから失敗がないとも言えるし、失敗することを恐れていません。

—その自分の軸を作るのが大変ですよ。

荒井良二は、絵本が描けなかった15年間でぶれない自分の軸を作ったんでしょうね。苦しい時期があったからこそ自己理解が深まると共に、表現者として何を大切にするか覚悟が定まったのだと思います。それが今の挑戦し続ける制作姿勢に繋がっているんでしょう。強い意志と覚悟を持ちつつも絵にはそれを滲み出させない。それもすごくカッコイイと思います。

—その評価について、教育と関連させて話されていましたよね。

荒井良二の絵を見ると、形の描画の面白さに目を奪われがちですが、色彩とその構成の美しさも大きな魅力です。絵を見ると、色や形、バランスの面白さなどの魅力が、もっと楽しめる鑑賞教育がより充実されることが大切だと思っています。その時に重要なのが、感じる心です。日常、美しい夕日や心地よい小鳥のさえずりを感じ取るのと同じように、そこに意味や理由を求めないのと同じように、絵も自分本位で感じるだけでいいと思います。初めのうちは作者の意図を読み取ろうと、変に身構えず、自分が何をどう感じるのか、全部自分寄りに感じればいい。それを大切にして、心を豊かにしていけばいいと考えています。

沼本先生のお話を通じて、自分の可能性の広げ方や、教育について考える機会が得られました。今後も、学習支援センターでは、学びにつながるイベントを企画してまいります。



LSC 資料紹介

学習アドバイザー 宮原 千咲

学習支援センターでは、大学教育、初年次教育、アクティブラーニングや授業手法などに関する図書を集めています。教職員には貸出もおこなっていますので、気軽に学習支援センター（協創館1階）までお問い合わせください。

コーチング心理学概論 第2版

西垣悦代・原口佳典・木内敬太 編著／ナカニシヤ出版



本書は、対人支援を行っている方にお勧めの書籍です。スポーツコーチングとは異なる、対人支援の手法としてのコーチングを取り扱っており、エビデンスに基づくコーチングがまとめられています。

本書は3つの構成となっています。まず、総論として、コーチングとコーチング心理学の定義を確認し、本書で論じるコーチングとコーチング心理学について述べています。そして、コーチングの基礎的なスキルとそのモデルについて触れながら、アセスメントの必要性やその実践方法も確認していきます。

次に、背景理論として、アドラー心理学や人間性心理学、ポジティブ心理学とコーチングの繋がりを確認します。その上で認知行動コーチング、解決志向コーチングなどコーチングのスタイルを取り上げます。

最後に、各論・実践編として、様々な現場で取り入れられているコーチングから、その効果やコーチの役割を考えていきます。そして、効果的なコーチングが行えるコーチの養成について触れながら、今後のコーチングの発展について述べています。

本書は、初版において「日本語で執筆されたコーチング心理学の学術書として、本邦初」の書籍であると編著者が述べているとおり、心理学として研究・理論に基づいたコーチングが論じられた著書です。初版から現在までの動向や新たな知見も盛り込まれ、第2版も新しい内容となっています。

— 教育におけるコーチング

教育に関わる者として、教育現場におけるコーチングについて触れたいと思います。

本書によると、海外では、教育現場におけるコーチングは学習者に対してではなく、教員に対する教育能力の向上を目的としたコーチングの訓練に主眼が置かれ、発展してきたとされています。教員がコーチングを受けることによって教育能力を向上させ、そして、教育の様々な場面で間接的に学習者に還元してきました。それに対し、日本ではコーチングを直接学習者に行う傾向にあるとされます。それは、コーチングをコミュニケーションスキルの一つとみなしていることに因があるそうです。

日本の教育現場で広がりを見せている「教育コーチング」は、確かに、人間の持つ可能性を信じることやその可能性を傾聴・質問・承認などのコミュニケーションスキルによって引き出すことなので、様々な場面で直接的に学習者に働きかけることもできると思います。学習者の中にある答えを引き出し、言語化を促す過程で、本人に「気づき」が起り、学びが進みます。そして、学習者が持っている意欲と能力を引き出し、目標達成や自立への支援もできるでしょう。

その支援のためにも、本書のようにコーチングのスキルだけでなく、理論やその背景を理解し、科学的な根拠に基づく実践を行う必要があると考えられます。コーチは専門的な知識が必要です。本書が理想として掲げているように、理論・研究や実践、一方に偏らない科学者—実践家モデルの実現によって、分析的な実践が可能になります。コーチングが教育業界において、現在課題となっている「主体的・対話的で深い学び」の実現や、「コンピテンシーをいかに育むか」などの課題解決に寄与する余地があると示唆されます。

<学び★サプリ>

2022 Vol. 22

本の表紙を開く前に

学習支援センター次長 木村 和美

「最近、どんな本を読みましたか?」。このように問いかけられたならば、本好きな人はここぞとばかりに「あの話題作を読んだ」、「次は〇〇を読もうと思っている」と、おしゃべりが止まらなくなることでしょう。一方、本を読むことは苦手・嫌いという人もいます。なぜ、本を読むことが苦手なのでしょうか。「文章を読むのがしんどい」、「読書よりももっと楽しいことがある」等、理由は人それぞれだと思えます。作家でもあり、教師でもあるダニエル・ペナックは「『本を読む』という動詞は『本を読みなさい』という命令形には耐えられないものだ。他の動詞、たとえば『愛する』とか『夢を見る』などと並んで、この『読む』という動詞は命令形の嫌悪感を共有している…」と述べています。つまり、本が「読まなければならないもの」となり、「読みなさい」という「命令」になってしまうと、読書は途端につまらないものになってしまうのです。

とはいえ、大学生にとっては「本を読まなければならない」場面も多くあります。レポートを書く、試験準備をする、卒業論文を書く…。本を読むことが苦手な人は

もちろんのこと、本好きな人にとっても先に述べたように「読みなさい」という命令形の読書はしんどいものだったりします。命令形の読書を少しでも楽しいものにするためには何ができるのでしょうか。その一つに「読書のハードウェア」を魅力的にすることがあります。詩人の長田弘は、本を読むための時間や場所は自ら作り出すものであり、「本を読むならば、深呼吸するように本は読みたい。そして、本を読んで人生の深呼吸ができるような場所があるとすれば、それはいい椅子の上だということとです。」と述べ、特に椅子の大切さについて語っています。

本の表紙を開く前に、自分にとって心地良い空間を探したり、作ったりすることで、少しでも楽しい時間を過ごすことができるのではないのでしょうか。まずは本を読むための「空間づくり」から始めてみませんか。

〔参考文献〕

ダニエル・ペナック (浜名優美・木村宣子・浜名エレーヌ訳)
1993『奔放な読書 ― 本嫌いのための新読書術』藤原書店
長田弘 2001『読書からはじまる』日本放送出版協会

<学び★サプリ>はまなびコモンズ掲示板でも読むことができます。

日本リメディアル教育学会 第17回全国大会参加報告

米満 雅美

8月23日～25日に愛知大学名古屋キャンパスで開催された日本リメディアル教育学会第17回全国大会に参加した。

今回は「あらためて高大接続を問う」をメインテーマとして、口頭発表を中心に開催された。3回実施された口頭発表と2回実施された部会企画は、学習支援、ICT活用教育、日本語、学習言語、学校教育、英語、理数系、医療系のセッションの中から1つを自由に選んで参加する方式だった。そのほか、基調講演「学校リスクの『見える化』活動：コロナ禍から高校生・大学生・教員の安全と安心を考える」内田良氏（名古屋大学大学院教授）、特別講演「高大接続 ― 予備校からの報告」玉置全人氏（河合塾 英語科講師）、近藤治氏（河合塾 教育研究開発本部 主席研究員）、ポスター発表、CRLA ワークショップが催された。

この大会では、口頭発表の石毛弓先生（大手前大学）「学

習サポートセンターの利用による学生の変化を探る」と、増田ひとみ先生（追手門学院大学）「大学の教育理念と経営方針に合わせたライティング支援施設の運営」、山田貴子先生（安田女子大学）「大学生の自尊感情と就業用文章作出困難感との関連」の発表が特に印象に残った。その他多くの先生方がおっしゃったことは、教員や学習アドバイザーによる学習指導は、多忙時や対象者多数の場合には満足な指導ができない。年々人員等が削られていくことも障壁となっているが、学習支援を学生同士の学び合いの場を充実させる方向へシフトして、教える側の学生チューターも、教えてもらう側の学生も、共に成長できるような施策を大学として更に発展させる必要がある、という内容だった。

私はまだ学習支援センターに配属されて半年しか経っていないが、各大学の事例や研究を聞くことで基本的な学習支援体制について学修することができた。今後も学習支援について研鑽を重ねながら日々の業務に取り組んでいきたいと思う。参加の機会をいただいたことに心から感謝している。



Hiroshima Shudo University

Learning Support Center
LSC NEWS LETTER
広島修道大学
Hiroshima Shudo University

発行日 2022年10月31日

発行者 広島修道大学 学習支援センター

〒731-3195 広島市安佐南区大塚東1-1-1 TEL.(082)830-1426

E-mail skill@js.shudo-u.ac.jp

©LSC NEWS LETTER は大学公式WEBサイトでもご覧になれます。